

地面の匂い

納富泰子

眩しい。

見開いた眼に白い光がなだれ込んでくる。顔の前に垂れ下がっている薄っぺらなテントのビニールを透かして、無数の細かい光の粒子が吹き出してくる。慌ててぎゅっと閉じた眼の裏に、鮮やかなオレンジ色が広がった。

ふうちゃん、また、あの夢？

ペンギンのかすれた声が聞こえた。房江は寝袋のなかで寝返りを打ち、瞼の裏で徐々に縮んでいく光の残像を追っている。段ボールの上に、ドレスの裾を捌いて坐り直すらしい乾いた音を立てながら、ペンギンが溜息をつき何やらぶつぶつ眩いた。よく聞き取れない。

ペンギンに拾われたのは、この秋の初め頃だった。

あの日この街は一日中、小ぬか雨が静かな呼吸をするように降っては、止んでいた。

房江は、大型店舗ビルが建ち並ぶ目抜き通りの、クログナモチの下の本ンチに、ぼんやりと坐り込んでいた。細かい水蒸気の粒が夕暮れの空気を緩ませ、敷石の隙間から立ち昇る沼地の藻にも似た黒く湿った匂いが、足元に纏わり付いた。

銅色の本ンチにはサックスを抱えた銅色のジャズマンが、異空間から掴み出された感じでなめらかに光って腰を下ろしている。房江は本ンチにへたり込むと、そのままストンパツグを抱いて、三時間近くも舗道に黒く貼りついた落ち葉を

見ていたのだった。

見上げると、デパートの煉瓦色の高い壁に並んだ照明のまわりに霧雨がぼんやりと白く浮き上がっている。いつのまにか夕闇が濃い。房江は重く湿った上着の襟を立てて、顎を埋めた。

どうかした？ と掠れた声が、頭の上で聞こえた。

顔を上げると、大きな体を斜めに折り曲げて覗き込んでいた女が、分厚い唇の端を引き上げる笑いかたをした。それがペンギンだった。

笑顔につり込まれて、房江は取り継るような声を出したのだった。

「体こわして職失って家賃を滞納して追い出されちゃって三日前に山陰の町から私鉄や鈍行列車を乗り継いでこの街へ来て駅のベンチとかデパートとかうろちょろして……」と、くどくどと言いかけると、ああもつそれ以上聞かなくなってもいいから、とペンギンは面倒くさそうに手を振った。人差し指に巻かれた包帯の紐がひらひらと揺れた。「聞いたつてみんな似たり寄つたりなんだから」アーチ型に描かれた眉と茶色に近い口紅の骨太な顔を歪ませてそう言うくと、ペンギンは房江の腕を取って立たせ、公園の自分のねぐらに連れていった。あたしはペンギンと呼ばれているの。それだけの自己紹介だった。わけは、歩き方を見れば分かった。

「当分、あたしと一緒に居たらいいわ。あたしの傍にいますと

危なくないから。女のホームレスはレイプされるからね」

ペンギンは気の良い世話焼きおばさんの口調だ。房江は女のホームレスという言葉が自分のことを指しているのだと呑み込むまでに少し暇が要った。騙まし討ちにあったような気がした。

「朝おきてどこで顔を洗つか髪を洗つにはどうしたらいいか教えてあげる」とペンギンは言った。

ペンギンの着ている服はどこで手に入れたのか、レースで縁取りされていたり大きなフリルが切り替えになっていたりするやたら仰々しい赤いドレスで、しかも男としても大柄なペンギンにびつたりのサイズだった。女装嗜好者向けのドレスなのだろうか。フリルの縁が黒ずんでいて、湿った古い蠟燭のような臭いがした。

ペンギンがお尻を振って歩く後ろに、眼だけをきよるきよると動かして小判ザメのように張り付いている瘦せて小柄な中年女を、公園のホームレスたちは一瞥しただけでことさらに興味も示さないふうだった。

この一角は、空気の流れも時間の流れも、街の賑わいとは違つて色合いをしている。公園の片隅に青く貼りついている低いテント群は、手強い寄生植物を想わせたが、近寄るとそれは吹けば飛ぶようなペラペラの安手のビニールなのだ。それでもなかでつづくまっついている人間は、薄っぺらなビニールをシエルターに見立てて取りあえずの安堵を得、世間から隠れ

たつもりになっている。

翌朝、公園の奥の水飲み場に顔を洗いに出て、途中のテントの端にはみ出したものに足を取られた。目を近付けて見ると、それは見事に潰れ果てコールトールに

浸けたように汚れて真っ黒に固まっているスニーカーだった。垢と脂が腐ったような強烈な臭気を放っており、それはどこ

のテントからも強弱の差はあるが漂い出ている臭いだった。あちら側の人間とこちら側の人間を区別するしるしのように、執拗に沁み付く沈んだ湿り気のある臭いだ。人間という動物の本来の体臭が凝縮すれば、こんな陰気な臭いを放つか。

人間も案外なものだと房江は思った。この臭いを、これから自分も薄い皮膜を重ねるように纏っていくのだろうか。重い気持ちで、朝日を機ね返すビルのガラス窓を眺めた。

川向こうの通りを、出勤するサラリーマンたちが足早に通

り過ぎていく。アイロンの利いた白いシャツや磨かれた革靴が、あちら側の色合いで光ってみえた。その群れのなかに、十三年前に別れた夫に似た後姿を見かけたけれど、夫に似た人は、別れてこつち数え切れないほど街角にいる。

大粒の雨が、突き抜けるような音を立てて、テントを包み込んだ。

雨粒が次々に楕円形に破裂するのが、ビニールシートの内側に透けて見える。膝を抱いて縛っている狭い空間が震え

叩き付けてくる音の強さに全身の毛穴が膨れる。洗い浄め、押し流し、消し去ろうとして、阻まれて碎け散る音だ。その硬い音は、息を詰めてうつむいている首の後ろや肩を打った。テントの狭い空間に雨の温度がひえびえと満ちてくる。足指の先が、冷たくなる。

ペンギンはただ上を見上げて座っている。

少し小止みになった頃には、ビニールシートは壁という壁に雨水を重く溜めて弛み、段ボールはウエハースのようにぐずぐずにふやけ溶け始めた。ようやく息をついて、公園の端にあるトイレに行った。その道筋に並ぶ今にも潰れそうにひしゃげたテントの隙間に、無気力に投げ出されている腕や足が、深い鬱を滲ませて見え隠れしていた。

段差が多い敷石は水を吸い込み、あちこちに浅い流れや朽葉を沈めた水溜まりを作っていて、どのテントも浮島のよう

うだ。

秋だつてのに梅雨みたい、とペンギンが不平を言いながら、ビニールシートの内側に下げた雨漏りでふにゃふにゃになった風雨除けの段ボールを外した。房江に手伝わせて、新しい段ボールに直角に折り曲げた別の段ボールを当てて千枚通しで穴を開け、その穴にロープを通して器用に結びあわせる。

床敷きも、ポリ袋で保護した新しい段ボールと取り替え、その上に剥き出しの乾いた段ボールを敷いた。ポリ袋が敷石で擦れて破れてしまわないように、濡れた段ボールを一番下に

敷く。歩きたびに、下敷きの段ボールが水の入った古靴のように情けない音を立てた。ペンギンは、ほだけかけた人差し指の包帯を縛り直し、やれやれと溜息をついて、ドレスの膝を大股に広げて坐った。

乾いた段ボールの暖かさにほっと一息ついたところへ、おまた新入りかい、と野太い声がして、テントの入口を跳ね除けて、大柄な男が入ってきた。髪を肩まで伸ばし、白髪交じりの髭に顔半分を覆われた男は、毛深い手に握ったブランドーの瓶を床に打ち込むように置き、飲もつや、と胡座をかけた。雨を吸い込んだ男の作業服がしんねりと饜えた臭いを放ち、濡れたスポンから滴り落ちる雫が段ボールに黒い染みを広げる。

あ、こちららふうちちゃんよ、こちらブーヤンね、とペンギンの紹介は相変わらず簡単だ。ブーヤンが、俺はあっちのほうの公園にいるんだ、と東の方を指差した。東だろつが北だろつが別りたいした意味はないのだというように、その指は流れた。

ペンギンが湯呑みを三つ並べた。房江は縁欠けの湯呑みの底に少しだけ注がれた琥珀色の液体を、勧められるままに口に含まんだ。珍しい味がした。横目で見てブーヤンが「どつだ美味いだろつ」と笑う。ペンギンが、「上等のお酒なのよ」と言つ。「高級ウイスキーと高級ブランドーに、焼酎とビールもちよつと混ぜてるかもしれないわね」

聞いているうちに、バーの裏口に出してある酒瓶を、ひとつひとつ逆さまにして、底に残った雫を根気良くひとつの瓶に集めたものらしい、と分かった。ブーヤンは酒瓶をひとりて抱え込むつもりらしい。

ペンギンが弁当を並べた。コンビ二のごみ箱から何とか拾えた期限切れのやつだ。一緒に拾いに行った仲間と分けたので二人分しかない。自分の弁当を半分差し出した房江にブーヤンは手を振つた。「あ、いいのよ、遠慮してるんじゃないのよ、ブーヤンはお酒のときは食べないの」とペンギンが大根なますを噛みながら言う。ブーヤンは、擦り切れた作業着の袖を肘まで捲り上げ、自分の湯呑みになみなみと酒を満たした。

酒瓶を空にしてしまったブーヤンはたちまち酔つ払つて、な、お前ら分かるか、と眼を据えた。一晩じゆう台車を引つ張つて、段ボールを五十キロ集めても、儲けが三百五十円。な、分かるか、お前ら、九時間、頑張つてへとへとになつて、たつたの三百五十円でことがあるかよ、なあ。

また雨がテントを激しく叩き始めた。雨音に負けまいと、ブーヤンは声を張り上げる。

それでも俺は体が続く限り、段ボールを拾い続けるぞ。ブーヤンは演説の合間に分かるかなあ、とペンギンのドレスの肩を何度か毛むくじやらの手で掴んで揺すつた。ペンギンは、キュウリの酢の物なんかをしゃりしゃり噛みながら、は

いはい、と古女房のようにあしらっている。

このひと、おかまバーでも呑んでる気分なのかしらね、ホステスの代わりなのね、あたしたち、とペンギンは口が悪い。ブーヤンは、まあ、そう言うな、一人で呑むと後が悪いんだ、と気弱に答える。このひとつたらあつちの公園の仲間たちにはお酒のこと内緒にしているのよ、分けると自分の呑む分がほとんど無くなっちゃうからなんだって、とペンギンが顔をしかめた。ホームレスに酒が一番有り難いの分かるでしょ、だから肝硬変が多いのよね……。そのとおり、とブーヤンが首をぐらぐらさせて肯いた。

そう、生きてることを忘れるほどに酔つ。そのまま死ぬたらどんなにいいかな。ホント、いつそケリをつけようと踏み切りやマンションの踊り場やら、散々うろつる歩き回って結局、今日は止めと、明日にしよう、って大抵のホームレスは一回はそういう経験あるんだよね。なあ、そうだと、とブーヤンはまたペンギンの肩を揺さぶる。だがな、翌日、胃痙攣でのた打ち回って我慢できずに病院に行つちまったのが、俺さ。「規則正しい食生活を守るように」って若い医者 of 野郎が言つんだよ。ブーヤンは、酒で濡れた髭を震わせ、まばらに抜け落ちた黄色い歯を覗かせて笑つた。

ブーヤンは、酔いが深くなると、のめり込むように自分の話をひたすら続けた。ペンギンが憐れむように言つ。ふうちゃん、よく見るのよ、捨ててきた筈の過去しか持たないと

こうなるのよ。ブーヤンは怒りもせず、ごもつとも、と前後に揺れながら目を半分閉じて言つた。一流証券会社のサラリーマンだったブーヤンなんて、想像もつかない。

ブーヤンの話は綿々と続き、東大と東北大を出してやったという息子たちの目慢に行き着いた。ペンギンが、でも一向に彼ら、父親を救いには現われないわねえ、あたしはずっと楽しみにまつているんだけどね。

どの面さげて会つんだよ今更。ブーヤンは溜息をつく。赤い眼をつつすらと見開いて、まったく、親父がどの面さげてさ、と口のなかで繰り返した。自分でもなぜこうなつたんだか、わけ分かんないのにさ。

あの夢を、また見た。

夢から目覚めたひとときだけは、房江は身内に新しい血が流れる気がした。私はすべてを失つた訳じゃない、と小さな充実と幸福が肋骨の真ん中辺りにころんと熱く生まれるのを感じた。

あの家に行つてみたい気がする。あの家は、まだあのまま、あの花郷町にあるだろうか。あの家を出ていったときから忘れた顔で生きてきたけれども、夢がああ頃に戻り引き戻していく夜の夢は見ない。夫は夢に一度も出てこない。夫と対で思い出される姑も出てこない。あの子と二人だけの夢だ。

夢に、繰返し捉えられているうちに、テントに映る秋の陽

が深まっていく。

ペンギンは手先が器用だ。ビニールシートのテントの弛みを手早く直しながら、ロープ結びは得意なの、と言う。あたしボーイスカウトにはいつてたから。随分生きる知恵を覚えたわ。船が座礁して無人島の密林で暮らすにはとても役立ついろんなことかかね。何も無いところから火を熾す方法。ロープ結びのバリエーション。急流を渡るには対岸の木にロープを渡してそれを頼りに行くのよ。シルバーコンパスで方位を見て、行くべきところに辿り着けるし、星座の巡りも知ってるし、天気予報もできるわ。ペンギンはいばってさんざん自慢した。

じゃあなぜ、習熟したそのシルバーコンパスとやらで自分の行くべき方位を見付けなかったの？ こんなところに迷い込んでしまつて……、と房江はからかった。ペンギンは溜息をついて言った。都会で遭難したときの方法は習わなかったのよ。

房江は、何度おしえられても、ロープがうまく結べない。そのうち冷や汗が出てきて、吐き気までして、座り込んでしまう。体調が日毎に悪くなっていくを感じる。ペンギンは横目でそんな房江を見て、何も言わずに房江がくすぐらずに結んだロープをきつちりと結び直した。そして、暇さえあれば眺めているスペインの写真集を持ってきて坐つた。古びて角が

白く擦れている写真集は、表紙に「アンダルシアの白い風」と書いてある。その字の下に、濃緑の丘陵一面にぎつしりと並び、陽を眩しく跳ね返した白壁とオレンジ色の煉瓦屋根の家々の写真が、現実感のない遠い過去の夢のように色褪せている。

ねえ、何であたしを拾つたの？ いつものようにこみ上げてくる吐き気をこらえて、膝を抱え込んだ姿勢のまま、房江は訊いた。ブーヤンがまた新入りかいつて言つたけど、ペンギンはいつもあたしみたいな人間を連れてくるの。

写真集から眼を上げて、ペンギンは驚いたように笑つた。いつもじゃないわよ、二人目よ、こないだのは、七十の婆さんだった。死んじゃつたけど。まあ、強いて言えば、インスピレーションかしら。猫だつて、拾わずにはいられない猫つてのがあるのよ。それに猫つてき、拾えば情が移る生き物じゃない？

ペンギンは目分が切つてやつた房江の短い髪を撫でた。そして写真集をぱたんと閉じて、猫が仲間を誘つような声で言った。今夜ふうちゃん、あたしと一緒にエサ取りに行かない？

夜の十時から午前二時まででは毎晩ペンギンは、外を歩き回つて食料を確保してきていた。房江は、いつか自分もやらなくてはいらないと解つていながら、まだふうちゃんには酷だから、と言われるのをいいことに逃げていたのだった。

エサ取りに否も応も無く行かねばならないことは分かつて
いる。コンビニのごみ箱から弁当を拾い、レストランの裏口
のポリバケツの残飯を漁るのだ。野良猫を追い払いながらご
み箱を漁る自分を想像するだけで、息が苦しくなった。ホー
ムレスは決して乞食ではない。一時的にこんな状況に嵌って
しまっただけだ。未だにホームレスになったことさえ納得で
きていないのに、ごみ箱を漁ってしまったら、もう元には戻
れない気がする。

その夜、ペンギンは、あとからついてくる房江の逡巡にお
かまひなく足早に飲み屋街の路地をいくつも通り抜けた。雑
多な家並みと低いビルの入り組んだ夜更けの道を急ぎ足に歩
く。

細い路地の奥にぼつとオレンジ色に滲む灯や、打ち水に
黒く濡れている古びた石畳には、積み重なった人の息遣いが
漂って、ほっと息が抜けた。だが、賑やかな表通りになると、
身が疎んだ。

赤や青の色ネオンが、ゴミ漁りにきたホームレスふたりの姿
を照らし出す。酔って距離が取れなくなった人々の肩や背中
とぶつかりそうになる。昏間のあの無視や拒絶はむしろ思い
遣りに近かった、とさえ思えてくる。すれ違いざまに酔漢の
あからさまな罵声を浴び、息が詰まった。人間の思惑や感情
が商売になっている場所、潜む、嬌声の蔭でじつと人を見定
める眼に脅えた。そこを、ドブ鼠のように人の気配を窺って

ちよろちよると餌を目当てに急いでいる。両肩が尖ってくる。
あの青テントの群れは、確かに、舗道に貼りつくことで身
を守っていた。青テントのゾーンからあちら側に繋がって
いる舗道のどこかに、歪んでずれている空気の変わり所がある
に違いない。その境目を越えて出てきた途端に、風の肌触り
が違った。

ペンギンは真つ直ぐな背中を見せて、脇目も振らず歩いて
いる。

ペンギンがビルの一階を占めている多国籍料理店の裏口で
足を止め、房江を振り向いた。ここよ、とその口が声を出さ
ずに動いた。三個のブルーの大型ポリバケツが、裏口の庇に
取り付けてある小さな裸の蛍光灯に照らされている。端が黒
くなった蛍光灯は、うす紫の瞬きを繰り返していた。

ペンギンはバケツのひとつに屈み込んで蓋を剥けて開け
ると、なかのポリ袋の結び目を開いた。ああ、運がいいわ。
ペンギンの囁き声が弾む。いま捨てられたばかりよ、ああ幸
せ、大収穫よ、皆、ここを狙ってるからね。小振りのポリ袋
を手早く摘み出し、次々に持つてきた布袋に落とし込む。こ
の店はねえ煙草の吸殻とかを一緒に入れてないから助かるの
よ、とペンギンが小声で言つ。ほらふうちゃん、こんなふう
なズシリと重い汁気のあるポリ袋を選ぶのよ。

ぽかんと見とれていた房江は慌てて自分の前にあるポリバ
ケツの蓋を開けた。腐りかけた生ゴミの臭いが鼻を打った。

その臭いを嗅いだとたんに、最近からだのなかにいつも潜んでいる吐き気が、ぐっと喉元にせり上がった。いそいで口を両手で押さえてその場を離れ、暗闇にしゃがんで吐いた。胃の奥から突き上げる苦しさに涙が滲んだ。その涙が不意に膨れ上がってこぼれた。花郷町のあの家の穏やかで明るい情景のなかで、幼い息子と声をあげて笑いながら遊んでいる自分の姿が目につかび、ママ、というあどけない甘えた呼び声が聞こえた。房江はその声を振り払うように首を振って、呻きながら吐き続けた。

ペンギンは何も言わなかった。

テントに戻ってペンギンに渡されたポリ袋には、残り物が何もかもごっちゃに入っていた。それは飲み屋街の道に散らばった吐瀉物と少しも変わらなく見えた。房江はペンギンに教えられたとおりそれを箒にあけて、ご飯だけを拾い出して水道の水で洗い、同じく拾い出した豆や人参、フライドチキンやポテトフライや肉などを水ですすいでご飯と一緒に、鍋に放り込んだ。固形燃料に火をつけ、ペンギンがどこかで拾ってきたという錆びた五徳を置いて鍋を載せた。

夜空の下でキャンプみたいに小さな炎を見守ってしゃがんでいる。ママ、星の王子さまのカレーライス？ そうよ、パパとママのお皿も並べてね、お外で食べるご飯はいつものよらずっと美味しいわよ。

雑炊はすこし変わった味がしたが、案外食べられた。洗っ

て火を通すとゴミバケツから拾ったものでも新品の料理に生まれ変わるんだからね、とペンギンは段ボールの床に並べられたリサイクル料理を満足そうに眺めた。自分もすぐにこの味に慣れてしまつのだろつ、と房江は雑炊からつまみ上げたスパイス風味のフライドチキンをゆつくりと噛み締めた。

夕食を食べおわるといつも、ペンギンは吊り下げた懐中電灯の下で横坐りになって、右手の人差し指の包帯を丁寧に巻き直す。その様子を見ていると、まるで大切な指輪がアクセサリーの手入れをしているように見える。

人差し指の先が欠けているわけを、隣のテントに住んでいるテキサス婆が、笑いをこらえるような上目遣いで教えてくれた。あれは、ペンギンに男を奪られた女が噛み切ったらかよ。

ペンギンは、テキサス婆の話には脚色が多いから気をつけろ、と言う。

ピストルの早撃ちのように喋るテキサス婆は、隣の県の外れにある特養老人施設から、家出して来たのだそうだ。八十八歳だというのが嘘のように、ぴんしゃんしている。年金が僅かながらあるので、家賃の要らないホームレスとしてなら恵まれている。それでも、食べ物素早くかつさらう腕はさすがだ。

テキサス婆は、兎を一匹、飼っている。あの兎はいつも、

テキサス婆の、相手の返事を踏み潰す勢いの早口なお喋りを、慣れきつた夫のように黙々とキャベツを齧つてやりすこしているか、婆の腕の中で、決して誰とも合わさない眼を遠くに向けているかのどちらかだ。

房江のホームレスに落ちるまでの経緯もまた、テキサス婆と同じくらい単純な話だった。

離婚したあと房江は知り合いの僅かな伝を頼って山陰の小さな運送会社で働いた。数年後に肝臓を病んで職を失った。家賃が払えなくなりついに一人暮らしのアパートも追い出された。親は早く死に、故郷の兄の家とも付き合いはほとんどない。兄嫁は陽気そうに振る舞う女だが小心な性格で、自分の縄張りを犯すものを決して受け入れない。

どこにも行き所は無かった。この九州の海沿いの街のことは忘れる他はないと思いついていた筈だった。だが、いったん気持ちの封印がぐずぐずとほどけてしまうと、結局、結婚して家庭を作り子供を産み育てていたあのひとときを輝いて思い出される街に引き寄せられて、あり金をはたき旅費にして戻ってきてしまった。

そして、あの昏間の夢に捉えられたのだった。

花郷町の家にこもっていた日向の匂いを、房江の鼻は未練がましく追っている。

今しがたの夢の中でも房江は、あの小さな家の化粧台板の

玄関ドアを難なく通り抜けたのだった。

狭い三和土から寄せ木模様の床にあがる。風に浮かんでいた足に不意に、みしりと力が入る。床板に吸いつく裸足の足うらが冷たい。短い廊下の突き当たりの、北向きの小さな窓しかない灰暗い台所には、白いテーブルが表に静かな光を載せている。その脚元に、鼻先の丸い青い翼の飛行機が仰向けに転がっている。

台所と居間との境の格子戸に、手を掛ける。曇り硝子の格子の戸は微かな音を立てて、するすると開いた。あの頃の夫が戸車にこまめに油を差していたのを思い出す。敷居をまたぐ。五、六歩、レースのカーテン越しの陽射しに温かく乾いた畳を踏みしめて、それから息を詰めて立ち止まる。

心のなかのものが一点に向かって落ちていくように、ゆっくりと体を傾け、おでこに汗ばんだ柔らかな髪を張り付かせて眠っている幼い男の子を覗き込む。なつかしい呼び名を囁く。

傍らの母親が苦しうに息をついて眉を寄せた。房江はそんな母親を愛しむように眺めた。何て若いんだろう。張りのある滑らかな鼻筋や額が、うっすらと脂を浮かべて光っている。いつもこうやって子供の添い寝のついでに眠ってしまった。

母親が必死で眼を開こうと顔を左右に動かしながら、やっと押し出した纏れる声で訊ねた。だれ、あなたはだれなの。

金縛りの状態から抜けだそうともがいている過去の自分自身から、時を惜しんで房江は坊やに目を移した。爪をクレヨンの黄緑色で汚した両手を、肩の辺りにゆるく握って眠っている。少し開いた小さな唇や柔らかな頬を視線で撫でる。子供の上に屈み込むと、溢れてくる温い水のようなもので胸がいつぱいになる。

母親がもがきながらようやく目をこじ開けたときには、房江もまた青いビニールテントのなかで、ぼっかりと眼を見開くのだ。

体調は日によって良かったり悪かったりした。堪らないほどの疲労感と倦怠感におそわれ、欲も得も無くテントの寝袋に潜り込み、そのまま眠ってしまうことも多い。そして、夢を見る。なぜか昏間の眠りの中でだけ見る夢である。決して先へ進まず、毎回また始めから繰返す夢だったが、見るたびに初々しい感動に揺さぶられて目覚めた。

初めて夢を見た日に、上気した眼でペンギンに一気に喋りまくった。

あの家にいた頃、私はなぜかよく金縛りにあつたの。子供の添い寝をしているとね、誰かがやってくるの。玄関から入ってきて裸足でみしりみしりと床板を踏んで、硝子戸をあけて、私の枕元にゆっくり立つのよ。もがいて必死に眼を開けるんだけど、そうしたら、いつも家の中はいいんとして、硝子戸は閉まって、玄関の鍵もちゃんと掛かっている。ど

こにも人の気配はないのよ。あれは、私だったのね。知らなかったなあ、あれは今の私だったんだ…。

ペンギンは包帯の指を翻して、拾ってきた雑誌や新聞紙を紐で器用に縛りながら、黙って聞いている。聞きおわってしばらくして静かな声で、よかったわね、と言った。

ペンギンと暮らし始めて一ヶ月が経った。

時々溜息をついては黙りがちになる房江を見てペンギンはふうちゃんきついね、と言った。あちら側とこちら側の境目のところが、きついよね。あたしたちはあちら側に言う言葉まで失っちゃうんだものね…。いいえ、言葉だけじゃないわ、と房江は眩いた。

実際こうなってしまうと、あちら側の人間だけに許される眼にみえないものがあるのだ、と分かる。仕事と家を失った途端にあちら側から奪われ、自分でも日々見失っていくものばかりだ。いや、そうではなく、あの子と別れたあのとときから始まっていた喪失だった、と思う。あのときはもう失つものなどないと思っただけで、作物は枯れても土は残っていたのだ。その土さえ、ここに来てから毎日すこしずつ零れ落ちていく。どうすることも出来ない。すべて零れ落ちてしまったら…。寝袋に顎を埋めて眩く、何だかとても不安なの、更年期なのかなあ…。ホームレスの更年期なんて何だか笑っちゃうわねえ。

寢袋に潜つて目を閉じていると、一日の始まりを忙しく行き交う車や人々のざわめきが、こちら側の物憂く澁む時間に沈んでくる。薄い敷石一枚の地面を這つて伝わってくる低く轟く街の音に、ただじつと耳を傾けている。薄っぺらなビニールのシエルターは目を閉じると消え、いつのまにか、舗道に素裸で転がっている自分がいる。

やがて陽射しが強くなると、敷石の隙間から地面の匂いが立ち昇ってくる。一面の化粧煉瓦に覆われて窒息寸前の土は、様々な匂いを醗酵させて、横たわる房江を包み込む。

細かく砕けてじわりと朽ちていく落ち葉の匂いは、押し入れの奥から出てきた夫の古い蔵書のツンとくる湿った匂いに似ていた。その匂いの向こうに立ち上がってくるのは、喫茶店の片隅で黙り込んだ男の指先で細い煙をあげていた煙草の匂いだったり、貝殻が白く砕けた海辺で打ち上げられたアオサが風や日に照らされて光る匂いだったりする。貝殻を拾う幼子の柔らかく風に靡いていた髪の毛の匂い、夫と繋いだ手が冷たかった雨の日の山紫陽花の匂いなど、遠い日の記憶に残る沢山の匂いを、地面は思い出したように片鱗にして吐いて寄越した。それは飢えて病み嗅覚が鋭くなった房江の心の内に直接響いて、小さな希望を生まれさせたり、止めど無い鬱に落ち込ませたりする。

地面の近くに寝ていると、いつか地面に溶け込んでいく。神が人を土で造った、と最初に聖書に書き付けた人間は、き

つとホームレスだったに違いない。

ペンギンは、午前中に駅で拾い集めて来た雑誌を同じ種類により分け、「本屋」に売るために両腕に本を抱え込んでテントを出ていった。出て行きなしに振り返って、ふつちゃん、魔法瓶にコーヒーマスター作ってるから温かいのをお飲みよ、元気になるから、と優しい声で言った。

コーヒーマスターは美味しかった。ペンギンの労りが喉を焼いて身体の内落ちていくと、本当に元気が出た。ペンギンはなぜだか女の子に好かれる。夜遅く裏口に残飯を出すレストランの女の子がペンギンに時々そつとコーヒーマスターの粉をくれるのだそつだ。

ペンギンは、携帯燃料でお湯を沸かして煎れたコーヒーマスターを毎回儀式のように丁寧にポットに注ぐ。そういつとときに、ぼつりと、生き直しが出来るんだつたらどんなに良いかしらねと眩いたりする。生まれ変わるかもしれない？と慰めると、そつね、そうしたらスペインの情熱的な歌姫になりたいわね、そして死んでもいいつていうくらいに烈しい恋をするの、と笑つ。あまりにありきたりなので笑つてしまつ。

境い目のとき、ペンギンもきつかったのかなあ、と房江は思いながらコーヒーマスターをゆっくりと飲んだ。なぜホームレスなどになつたのか、ペンギンは肝心なことは何も話さない。どこからこの街へ流れてきたのかさえも、分からなかつた。そ

の代わり、房江のこともこちらから話さないかぎり何も訊かない。ただ時々、房江の眼をほめてくれる。

ふうちゃんの取り柄はその大きな切れ長の眼だわねえ、眼の下の縁がアイシャドウでも引いたみたいにつつすらと黒ずんで、色っぽいわ。ペンギンは、女の眼から見た女の眼の色気の話をしている。房江は、色気の話は苦手だ。目分が色っぽいとしたら、それは愚かな罪のあらわれのような苦い気持ちになる。

あの子が幼稚園の年長組になり少し手が空いた頃だった。

房江は、高校の同窓会に七年ぶりに出席の返事を出した。

二次会のクラブで、隣のクラスだった親しくもなかった筈の男に、いい旦那なんだろ、幸せそうだな、と声をかけられた。そのとき房江は、豊かな胸を溢れさせてはちきれそうなレザーのミニスカートの腰を突きつけるようにテーブルの間を縫って歩く、ポルトガルから来たのよ、と誰かの問いにかすれ声で答えた若い女の様子に、気を取られていた。金髪の小柄なその女は、客の男たちの肩にじょうずに手をすべらせていきながら、健気なほど一生懸命に客の飲み物に目を配ってボツクス席を動き回るのだった。髪をかつちりと油で固めた黒服たちの切れるような動きにも眼が吸い寄せられる。誰もが物語を演じている場所だった。それぞれの役割を演じている人々の動きが珍しくて、初めてこういう場所に入った物

珍しきできよるきよるしていた房江の様子に、世間知らずな初心な女だと思って、つい気持ちが動いたのだと、あとで男は言った。

あのとぎ、男の呼びかけが目分に向けられたものだともよく分かり、え、と上気した笑顔で振り向いた房江の隣に、男は素早く体を滑り込ませたのだ。昔は売れたけど人気が落ちた映画俳優のような、粘りつ気のある気取りを持つ男だった。本当らしく聞こえるお世辞が上手い男だった。男の饒舌に房江は引き込まれた。

それから三度その男と会ってそのあげくの、本当のことではない夢物語のようなうかうかとした、たった一度の關係だった。その日、家に戻る途中の幼稚園で、お迎えの普段着の母親たちに混じって子供の笑顔を見た時には、さすがにぞつとして、できたらさっきの出来事は夢のままに済ませたいと頭から追い出した。それでもどこかじくじくと拘りがあって、親友に打ち明けた。その親友からの不用意な葉書を、たまたま訪ねてきた姑が郵便配達人から受け取ったのは不運だったと思つた。

房江が妊娠してしまつたことで一人息子の結婚に譲歩したという不本意な経緯に姑が拘り続けていることは、房江にも分かつていた。夫がいない所での執拗な糾弾が始まつた。房江は俯いて、テーブルの角をしきりに指で擦りながら、短い言葉で答えた。言い逃れはきかなかつた。

小さな新興宗教の熱心な信者である姑は、愛、愛、愛、という言葉を何度も口に出した。あなたの「愛」と、私の「愛」は違います、と思つたが、ではどう違ふのかと言われたら、自分でもよく分からないのだった。姑に愛されたことなどなかったと言いたかつたが、今となっては、愚かで空々しい言ひ分だと自分でも思つた。

あなたに育てられたら、孫はろくなものにはならないわ。姑のその言葉を、房江にはその場だけの叱声だと思つて、はい、とうな垂れたのだったが、気がついたら巧妙に離婚話が出来上がつていた。

房江は半ば繰られるように荷物を纏めた。

そういえば、結婚のときに、婚約指輪も結婚指輪もお袋が揃えてくれたんだと夫は言つていたなあ、と思つた。それが、姑の言う「愛」なのだろう。だからあたしは少しも嬉しくなかつたんだ、と房江はビロードのケースをふたつ、夫のハンカチが入れてある整理筆筒の抽斗に、投げ捨てるように落とし込んだ。けれどもどこかで、これは夢をみてるんだ、という気持ちが出ていた。あり得ないことだから、いつか醒める夢だ。本当のことだったとしても、修復はきく、何とかなる、というどこが高を括つた気持ちがあつた。あの子から離れてしまふことを決して信じてなどいかなかった。これは、いつときの茶番劇だ。……きつと何とかなる。

夫は、分厚い封筒を房江の揃えた膝の前にゆっくりと置いて

た。百万ある、といった。その声が喉に絡み、ひとつ咳払いして、少しだけおまえも今後のこともあるつから、と小さな声で付け加えた。目を逸らし続けていた夫が顔を上げて房江を見た、その目の中にあるものを理解したその時になって、初めて、震えがきた。これは、茶番劇でも夢物語の続きでもない。

震え続けている房江に、泥棒に追い銭みたいなものだけど手切れ金と思つて頂戴ね、と姑が、横を向いたままさすがに自分を煽り立てねばならない息の乱れを見せた。私はこの人たちから何を盗んだんだろう。夫が失つたものと、私が失うものを比べると、私が一生失い続けるものの方が大きいではないか。そつ思つたら頭にかつと血が上り、やがてそれが冷たく胸元に降りてきた。

姑が言うとおり夫の愛を裏切つたのはこの自分だった。この土壇場にきて、子供に対するほどの烈しい執着が夫に湧かない自分は、とつとくに、母親に支配され続ける夫を諦めて、漂いはじめていたのかも知れない。

金などで子供との絆を切られて良い筈がなかった。押し黙つて坐つていた。そして、結局、涙を初めて流しながら、封筒を拾い上げる他はなかった。

幼稚園から帰ってきたあの子の、いなくなつた母親を捜しまわる泣き声が聞こえるような気がして、その声はずつと房江の体の中に一本の細い糸のように揺れ続けている。

テキサス婆は饒舌だ。テントの横の植え込みの縁石で日向ぼっこをしながら、訊ねないことまで話してくれる。

あたしはね、二十八年前に、住んどった家は売って五百万円も出して老人施設に入つたっちゃけどね。あのころ施設を作つた経営者は、年寄りには八十五歳過ぎたら、たいがい端から死んでいくとも思つたとかいねえ。当てが外れたとは経営者も人居者も一緒たいねえ。ちょうど来たバブルで折角の五百万円も値打ちが下がつたしね。そのつえ、二十八年経てば、あたしの四人部屋でも、あつちむいてても、こつちむいてても、病人だらけ。二人は痴呆症で目が離せん、一人は大腿部複雑骨折の後は寝たきりやもん。ひとりだけ元気なあたしは夜中も起こされて介護よ。お先真つ暗。

テキサス婆が入っていた小さな特養ホームは、看護婦や付き添い婦を複数雇つゆとりどころか、破産しかねないぎりぎりの経営状態だつたらしい。

昔は、歌のグループやら民謡のグループ、俳句やら短歌の会、手芸、とそりゃ楽しかつたよ。でもみーんな、どんどん年寄りになっていくばかり。駄目になってしもつた。いくら元気でまあしには、同じ部屋の三人を背負つて看病していく力は、とても出らんかつた。地獄を見る思いちゃ、あのことたいね。抜け出さんやつたら、近いうち疲れ死にで終るしかない、と思つたよ。そやけん、あたしは、施設から家

出したよ。身軽に、自由になりたか一心でね。

テキサス婆はそう言つと、腕に抱いた兎の頭を撫でた。だらりと胴体を伸ばして抱かれた兎は、今日も遠いところに焦点を合せている。手を伸ばしてその丸く小さな頭を撫でる。兎はゆつくりと目を閉じる。兎のお目はなぜなぜあーかーい、あーかーい人參、ぱべたからあ。あの子が頭の隅で歌っている。ずいぶん遠いところから聞こえてくる歌だ。

テキサス婆が髭の辺りを撫でてやると、兎は目を細めてグウグウと低くこもつた鳴き声を立てた。ほら、喜んでいよ、この声。テキサス婆の方がよっぽど喜んでいよ。施設の部屋のペランダで飼われていたのを連れて来たのだそつで、テキサス婆も、この子だけは捨ててくるに忍びなかつたのだといふ。あたしとおんなじくらいの年寄りなんやけど、孫のごたあ気持ちがあるとよねえ。へんやろ？ と眉を寄せて笑つので、変じゃないけど、と言いかけると、それを無視してテキサス婆は言葉をかぶせる。あたしもお迎えが近いやろつけん、最後までい身軽でいたいとよね。ホームレスほど身軽なもんはなかもんね。すいすいとあの世に行けるつちやなかるつか、と思つてね。

テキサス婆の話には脚色が多いから、とペンギンは言つたけど、嘘を言っているようには見えなかつた。

テントを震わせる風が、明け方まで止まなかつた。

この二、三日、房江の体調がひどく悪い。しつこい背中
の圧迫痛と地の底に引きずり込まれるほどのだるさを抱え、氣
持ちの揺れ体の揺れのままに、眠ったり目覚めたりを繰り返
している。

眠りに落ちていくかと思つと、もう、あの家に風のように
入っていくのだった。腹部に重苦しく張り付いた膨満感や痛
みが消え、体が解き放たれたように軽い。胸の中が熱いとき
めきで満たされる。夢から目覚める。そしてまた、夢に引き
戻される。始まりも終わりもない、幼いあの子に吸い寄せら
れるだけの断片の繰り返しだ。だが、夢の向こうの風景には
鮮やかな体温が感じられた。あまりにそれが生々しいので、
ずっと続く平凡な生活を信じきつてぐっすりと眠る若い自分
を見ていると、もしかしたら時の隔たりが一瞬の幻のように
消えて、この母親の身に戻つて目覚めるのではないか、と思
えてくる。けれども不意に、ひやりと胸に不安が忍び込む。

目覚めればやはり、ホームレスだった。

その日の昼間は、木枯らしが太い濁つた声で唸つたりしゅ
るると息を吐いたりしながらテントを煽り続けた。夕方か
ら雨になった。風の強弱のままに、テントを打つ雨音が変わ
つた。この不意に変化する音に、慣れる日がくるのだからか。

渦を巻く雨風にテントごと翻弄される。馴染んだ地面の匂
いも風が持ち去る。ここがどこなのか今何時ごろなのか見失
いそうになる。剥き出しに近い路上生活者には、空間に渦巻

くあらゆる音がまともなぶつかつてくる。房江はその渦に巻
き込まれながら小刻みに眠つたり目覚めたり呻いたりした。
夜が明けたら、房江の片耳が聞こえなくなっていた。雨や
風の烈しい音が耳の奥に詰まつてしまったよつだ。

聞こえなくなつたら困るわ、と房江は耳朶を引っ張つたり
叩いたりする。頭の中に押し寄せてくる街の音に紛れて、何
とか生きているみたいなものなのに。

ペンギンが他人事のように言う。「路上で雨曝し日曝しに
なつたら人間だつて早く朽ちるわよ、そつやつて、音に自分
を明け渡して何も考えようとしなければ、余計にね」

一日、ぐずぐずと憂鬱だった。そんな房江の氣分を引き立
てようと思つたのか、シャケおむすび一個ずつとコーヒー
杯の夕食が終わると、ペンギンが、散歩に行かない？と言
つた。

市街を縦断する川に沿つて、歡樂街が広がっている。橋の
上で立ち止まり、欄干に凭れた。つるつるに磨き上げられた
赤御影石の欄干が、手のひらに冷たい。ペンギンは房江の聞
こえる耳の側にさりげなくいる。河口に近い川面は、赤や緑
のネオンの色を小刻みにちらつかせているが、引き潮にかか
つているらしく端の方に泥混じりの砂地があらわれ、灯をし
らじらと載せている。潮と泥の臭いが、湿つた冷たさで鼻の
奥まで入り込んでくる。満ち潮になるとあの辺りで流れが逆
になつて、上流から来た水の流れとせめぎあつたよ、とペン

ギンが橋の少し上流の砕けた灯が鱗のようにさざめく川面を指差した。

欄干に寄りかかっている頭上を、白い鳥が舞った。硬質なバネを翼に感じさせて斜めに旋回する鳥影は、ネオンの隙間の間に一瞬紛れてはまた白く浮かび上がって空中をよぎる。房江が驚いた声をあげ首をめぐらせて行方を追うと、ユリカモメよ、とペンギンが教えた。鳥って、鳥目じゃなかったっけ？ ペンギンが、ネオンの灯りがけっこう明るいからね、と答える。

この街はね、夏になると夜中にセミが鳴くのよ、そういう街だから、こんなあたしたちも住めるのよ。

風はだいぶ収まり今夜は少し暖かいが、橋の上は海からの冷たい風が吹き付ける。

「こらんよ、空の鳥を、野の白百合を……、とペンギンがかすれた声で口ずさんだ。播きもせて紡ぎもせず、やすらかに生きる、とそこまで小声で歌って、あと忘れたわ、と笑った。子供のころ教会でいつも歌ってたの、何て美しい歌だろうと思ってたわ、明日のことは明日が考える、ありのままであれば神様が生かして下さるっていう歌よ。でも、リストラにあったあげくとか、病気で働けないとか、いろんな事情を抱えてこの美しい街に流れてきて、ホームレスって呼ばれて、結局、飢えて病んで死んでいく人たちを見てると、この歌の意味を考えこんでしまっわね。」

夜更けに飛ぶユリカモメは、やっぱり一羽しか見当たらない。

あの家をどうしても見に行きたいという思いが、日に日に強くなっていく。ペンギンは、とっくの昔に捨ててきたものを何で見に戻るの？ と言っつけねど……。

昼間の夢が、錯覚を起こさせている。夫が転勤を願い出てあの家を売り、母親と息子をつれて関東の方へ去り、もつあそこには他人が住んでいるのだ。分かっていながらなげか、あの家の前にもう一度だけ立ちたい、という思いを抑えられない。

ペンギンに言っつ、やめといた方がいいわよ、と言っつ。

あなたの夢は只の幻なのよ、夜中に鳴くセミや、ネオンの中を一羽だけ外れて飛ぶユリカモメのような、錯覚の夢。今のあんたがあの頃のあんたと結びつく筈がないのよ。過去どころか、まともな人たちが住むあちら側にさえ戻れないでいるじゃないの。

あたしたちはなまじつかあちら側と開けるとひどいことになる。あちら側とこちら側は、まるで違う世界なのよ。あたしの「スペイン」だって、決して行けないからこそ、こちら側であたしを自由に解き放ってくれるのよ。

あたしたちはもうあちら側では、道端に転がってる犬の糞ぐらいの存在よ、とペンギンは吐き捨てるように言っつ。邪

魔で汚ない犬の糞。だからあちら側に対しては自分を見えない存在にしてなきや。あちら側のことば、もつ忘れて諦めなくっちゃね。元気にホームレスするためには振り返っちゃ駄目。ふうちゃん、あたし上手に言えないけど、言っている意味、分かるわね？

房江は逆らうように、口紅を塗った。もし昔の知り合いに出会ってもあまり惨めじゃないようにするわ、と髪を梳かし、少ないなかから衣服を選びはじめると、もうペンギンは何も言わず、黙って電車賃をくれた。食パン、二袋ぶんくらの電車賃だった。それを言うと、あんたの飢えは、食べ物じゃないんだもんね。とペンギンは呟いた。でもね、とペンギンは歩き出した房江に追いかけるように言う。今に分かると思っわ、。在りし日は、失うばかりのこと。ペンギンの言うことはいつも芝居がかつてるね、と房江は苦笑いした。失いたくないから、あの日々を確かめに行くんじゃないの。

隣の市との境に近い私鉄沿線の奥まった住宅街は、昔のまに静かだった。花郷町三丁目二十番という緑色のブリキの番地札が色褪せて少し歪んで、角のブロック塀に打ち付けられている。生け垣の多い道は、あの頃と同じ匂いがしている。角を曲がると用水路沿いに立つ大きな柳の木が目に入った。その柳の向こうに、青い屋根の白い壁の絵本から抜け出したような小さな平家が、少しも変わらずあった。動悸を抑えて

足を速めた。あのころと同じ色の夕焼けが道の果てに広がっていた。

家の前に立った。薄いベージュとブルーが混ざり合ったタイル貼りの門柱から段を二段上がり、玄関まで十歩。左手に小さなテラスがあり、レースのカーテンが見える。狭苦しい前庭には、房江が新婚時代に植えた沈丁花も薔薇も、みなそのまま幹が太く育っている。

しばらく、立ち尽くしていた。

胸に熱く溜まっていくものが、喉もとで震えた。

家の傍らを流れる、細い用水路を見下ろした。石垣から生えた雑草の影を映し、流れを白く光らせて所々に石の小さな橋を掛けている。幼稚園に行き始めたばかりだったあの子が、息を切らせて家につけ込んで、すぐに網を持ってすつ飛んでいったので、なによなによ、と追いかけると、この小川に細い蛇が身をくねらせて泳いでいたのだった。あの子は生き物がとても好きで、蚯蚓やナメクジをせっせと集めてボケツトに仕舞い込んだ。犬にも猫にも虫にも、生きているものにはすべて、親愛の気持ちを持つ子だった。ほら新鮮よ、といて鉄を振り上げている蟹を見せてそれを料理したら泣き出して食べなかつたし、赤い斑点が息づきながらさざ波のように変わっていくイカを見せたら、家で飼っ、といつてきかなかつた。人が生きていくということが実は残酷なことだということもまだ分からないあの子を置いて、房江はこの家を

出たのだ。

門柱を撫でた。冷たい手触りのタイルは、あの日々の日向ぼつこの時のほんのりと暖かい手触りを記憶し、この家の前の狭い路地を駆け巡っていたあの子の賑やかなお喋りが、そこここに散らばっている。

不意に、ガラス戸からレースのカーテンをとおして、テラスにオレンジ色の灯が零れた。いつのまにか暮色が濃くなっていた。女の影がベージュの厚地のカーテンを引いた。家の灯が、温もりのある重たさに変わった。

見知らぬ家族が住んでいる、と分かっているながら、あの灯の下に夫や幼い子が自分を待っているような気がした。私は、ちよつとお出かけしてただけなんだ、とそんな気もした。駆け寄ってくるあの子の向こうで、夫の気弱で臆病そうな眼が、お帰り、遅かったね、と溶けるように瞬いて微笑むのが見える気がする。

いま、長い夢から醒めて、ああ、夢だったのか、よかつた、とドキドキしながら、子供の傍で起き上がって大きく息を吐き出しているのだつたら、どんなに幸福だろう。

目の前にある、艶のある青い屋根瓦も、ペンキが剥けたテラスの柱も、門柱の脇の虫食いの多い珊瑚樹も、夫の手製の少し歪んで釘の錆びが白ペンキに浮き出た門扉も、みな古びてはいるが、そっくりあのころのままだった。あの子の小さな手が懸命に押した玄関ドアも、やつとあんよが出来て、座

り込んで撫でていたマンホールの蓋も、あの子の記憶を貼り付けたままそこにある。

ただ、その光景を、ねずみ色の水のような時の流れが、うつすらと覆っていた。

大声で泣き叫びたくなるほどの想いに胸を灼かれ、そこを離れた。

エサ取りにも大分慣れてきた。だが毎日の食べ物を確保することはなかなか難しい。何も拾えない日が結構ある。昨日は、テキサス婆が兎のために八百屋の裏から拾ってきたキヤベツの外葉を分けてもらって酢と醤油を振り掛けて齧った。ひどく青臭かった。兎の上前まで搔ねるなんてね、とペンギンが眉を寄せて笑った。

このところ晴れた日が続いている。せめて、それだけでも有り難い。名前も知らない街路樹が、陰翳の濃い日差しにまみれて、小刻みに光りながら風に翻っている。舗道の煉瓦の敷石やアスファルトの車道を陽が温めている。ビルの窓が眩しい。

ペンギンが寝袋を抱えて、外へ出ていった。川沿いのコンクリートに広げて干すと、夜は地面の冷えをいつとき忘れ、日の匂いのするささやかな幸せのなかで眠りにつける。

借りていた鋏を返そうと、房江は自分のと反対側にあるペンギンの私物置き場のカーテンを開けた。どこからか拾って

きたらしい古ぼけたビニールのジッパーで開け閉めする洋服掛けが据えつけられ、そのほかにもこちゃこちゃと化粧ボックスや額縁みたいな鏡や沢山な本や洗面器などが置いてある。鏡を置くところとして、洋服掛けのビニールボックスのジッパーが半分開いているのに目が行った。そこから覗いているのは、紛れも無く背広だった。上等の生地、背広は、決して拾い物ではない感じで、傍に虫除け剤まで下がっている。そのグレイの背広の落ち着いた細いストラップや、揃えて並べてあるネクタイの品の良い質実なセンスが丁寧に育てられた息子であったことを感じさせた。それがペンギンの優しさに繋がり、ペンギンがその生死すら口にしたことがない父親や母親にまで繋がっていく。

何よ、あなたにも捨て切れない過去があるじゃないの、と房江は小さな声で言った。

外へ出ると、ペンギンが腰に手をあてて空を見ている。視線を辿ると、ビルの隙間の北の空に飛行機が浮かんでいた。この街の南部にある空港から飛び立つばかりの飛行機は、もたげた先端を丸くきらりと光らせて高度をあげていく。

ああ、いいわねえ、とペンギンが眩いた。あんなふうに空を飛んで、あたしもスペインに行きたいなあ。スペインはいよいよねえ、音楽がいい。あの何か、遠い記憶から聞こえてくるようなどこかのんびりとした哀愁と切なさがいいよね。陽に温められた白い壁とオレンジ色の屋根の坂の家。明るい乾

いた日差し。尻尾を立ててゆっくりと道をよぎる黒猫。立つたまま飲む居酒屋。フラメンコギターのどこか胸騒ぎを誘う、這うような音色……。ペンギンは、行ったこともない、そしてたぶん行くこともないだろうスペインの話を、とても懐かしげに話す。

北の空の果てに淡く消えていく機影を目で追いながら、房江はいつか見た機上からのこの街の夜景の鮮やかさを思い出した。あたしたちの住む街の夜が、あんなに漆黒の闇を持っていて、その闇が美しい光のきらめきに満ちているなんて思いもしなかったわ。ペンギンは頷いて、そうよね、地上にいると街の灯は見上げる場所にあるから、足元の地面の暗闇を忘れちゃうのよね。

夜になってプーヤンが来た。今日はわりにおとなしい酒だった。たいてい、コース料理のように手順良く酔って、変り映えのない愚痴をこぼして、最後のデザートあたりでペンギンに、もう、帰ったら？ とつんざり言われて素直に追い出されていく。それが妙に律儀な感じで、房江も以前ほど嫌だとは思わなくなっている。しかし、やっぱりうざったい酔っぱらいだ。

この街は、遠巻きに俺達を見張ってやがる。たぶん街も個人のことはいくら頑張ったって、手の打ちようがないんだろ。うさ。当の俺だって、自分でも、何を望んでいるのか、何を

望んでいないのか、さっぱり分からないもんなあ。長年信じてきたものが、皆ひっくり返っちゃったしなあ。なあ、お前ら、自分がどこに本当に行きたいのか、言えるか？

俺には分からない。とにかく、どこかに行かなくなっちゃならないんだ。いつも苛々と焦った思いばかりが湧き上がってくる。俺達みたいな人間が何とか答えが出せるまで、しばらくただ黙って受け入れてくれる場所が、この街のどこかにあったらいいんだけどなあ。

そうよねえ、とベンギンが愛想良く言った。足元のこんなに美しく組まれている煉瓦タイルの敷石だって、あのガラスの城壁のようなビルだって、震度六くらいの一揺れでもくれば、あつというまにグチャグチャなのにね。目にみえる儂い作り物には、お金かけるのよねえ。

インターネットだとか崩れた道徳観だとか遺伝子操作だとか、大不況も一緒になつてうねり始めている時代に、世間から弾き出されて、それしか持たない過去に向いている自分たちは、川に流される葉っぱの蟻のようだ、と房江は思った。見えない背中の方角にただ茫然と流されていくしかない。

シエルターがあつたらいいのにな、と房江が言う。決して冷たい黒い水溜まりの多い場所じゃなくって、乾いて温かい、ほんの少しの幸せをくれるシエルターよ。

そんなの、ふうちゃんお得意の夢物語だわね。あちら側の人間が、メリットなんか何も無いことをすると思つ？ ペン

ギンは身も蓋もない。

またあの夢を見る。

冬の陽射しがレースのカーテンを明るませている。部屋に穏やかな温もりがこもっている。窓辺に吊り下げられた蔓性の観葉植物にも陽は柔らかくさしている。

深い眠りの母子のゆっくりとした息遣いが聞こえる。この家のなかに立っているだけで、体中の細胞が潤い、気力が満ちてくる気がする。わき上がる泉のように新鮮な気分になる。観葉植物の蔭に何か動いたような気がしてびくりと窺がうと、見知らぬ女がこちらを覗いている。どこから入ってきたのだろう。眼ばかりぎよるぎよるさせている日焼けした女。荒んでこけた茶色の顔に口紅の鮮やかさが無惨な感じで浮き上がってみえる。だれ？

と眩いて息を呑んでお互い見つめ合っていて、あ、と声が出た。それは壁に取り付けられた等身大の鏡に映っている房江自身の姿だった。

子供を腕に抱え込んで眠っていた若い母親が、呻き声をあげて身動きし、あなたは、だれ？ と声をあげた。

目覚めてしばらく、寝袋でじつとしていた。聞こえない筈の片耳の奥で、ジーンと地虫のような音が微かに聞こえる。陽に温められて弛んだテントのビニールの匂いが、あの部屋に燃えていたストーブと同じ匂いだったと気付いた。

テキサス婆が公園の水飲み場を汚して困る、とみなぶつぶつ言っている。たしかにねえ、あそこで兎の糞箱を洗われるのには閉口するわね、とペンギンも頷く。テキサス婆はいつも中身を傍の川に捨てた後のケージを水飲み場に運んでくる。それから洗面器に汲んだ水を勢い良くなかに零して、拾ってきた棒切れでがしがし掻き回す。ケージの底にこびり付いた赤っぽい尿と溶けかけた丸い糞が流れ出て、足元のタイルの隅や芝生に茶色の水溜りを作って靴を汚した。強い糞尿臭が立ち込めている。ただでさえ汗や垢の臭いで嫌われるのにその上に、この前歯の出た生き物特有の強い臭いが染み付くのは勘弁して欲しいね、と誰もが顔を曇めた。

聞こえよがしの非難をテキサス婆は一向に気にしない。

ちかごろは、そうよ、あたしはホームレスたい、それがどうした、という気持ちになるとよ、とテキサス婆は、洗濯物を力を込めて絞りながら言った。足元のページューのタイルに、水がゆるく擦れながら落ちて撥ねた。芝生の隙間で干からびていた兎の糞が、水の勢いで二、三粒ころころと転がった。

あたしのプライドやら、もともとたいしたもんでもないしね。だいたいあげん大事に育てた息子でちゃあ、結婚する相手次第でこげな親は邪魔だという顔に変わっていくやろ？なあも、信じられん。施設から逃げ出したけれど、あたしは息子のところには行かれない。テキサス婆は、すすぎ上げ

た洗濯物をふたたび千切れんばかりに絞り上げた。

房江は、私はそういう目には遭わないで済んだけれども、と呟き、棄てられた怨みはあの子の方にあるのだろうな、と思う。だが、十八歳に成長した筈の息子の今は、あまり考えたくなかった。

息子はもはや房江の知らない男になっている。道ですれ違つても分からないだろう。

あなたは良かよ、とテキサス婆は言う。子供のことで痛い思いはしとらんやろ？

房江は、あの子を産むとき一昼夜苦しんだわ、と答える。テキサス婆は、喜びのための産みの痛みなんか痛みのうちに入らん、と笑い捨てた。大人になっていく息子はそりゃ一筋縄ではいかんやつたね。てんやわんやで育てたよ。親つていうものは、何かと救いたいもんよ。息子は自分の気持ちひとつでぎりぎりに生きとつけんね。母親が喜ばうと血の涙を流そうと知ったこつちやない。そのうち年寄を疎む嫁でも見つけてくればまあ、息子なんて詰まらんものよ。あなたは幸せよ、良か思い出だけで…。神様に感謝せなね。ペンギンが言う。「テキサス婆のような姑を持った嫁も可哀想だったわね」

本当はあたしのこの人差し指は、大学生の頃にアルバイト

で電器店の手伝いをしていたときにイタチに食われたのよ、と包帯を巻き直しながら、ペンギンは言つ。

得意先の一人暮らしのお婆さんが電話を寄越したのだといふ。「天井裏に何かいます。スポット照明を外してその穴から追い出してください」ペンギンが出向き、ははあ、何か走り回つてますね、と言いながら脚立に乗り、照明の器具を外して穴の縁に右手をかけたのだそつだ。

首からぶら下げた懐中電灯を左手で持ち上げたそのときにね、ヤツが穴に掛けたあたしの人差し指に噛み付いたのよ。女つてこついつとき肝が据わるものらしいけどね、根が男のあたしだからさ、肝を潰して脚立から転げ落ちたわよ。人差し指の先をイタチに食べられたと言つたら、たいていの人が気の毒そうにしながらそれでもやつぱり笑つから、あまり言いたくないのよね、ほらふうちゃんも目が笑つてる。

で、イタチはどうなつたの、と訊ねると、お婆さんが言つには、穴から飛び出して庭先に跳ねてどつかに行つちやつたんですつて、とペンギンはつまらなそうに言つた。あたし、すぐに病院に飛んでいったから、ヤツを見てないのよ。

男をめくつて女と掴み合いの喧嘩をして指先を噛み切られたのだ、というテキサス婆の話と、ペンギンの話の、どつちが本当なのか、房江には分からない。ペンギンの包帯巻き直しの儀式の度に、房江は人差し指が噛み干切られる一瞬の痛みを、小さな火花のように想像してしまふ。

ゆつくりと包帯を解くペンギンはどこか満足そうに見える。ペンギンは切断面の光った皮膚を剥き出しにして眺め、そつと頬にあてて眩く、このつるつとした感じが妙にいいのよねえ。そして、「アウトサイダー」のマット・ディロンつて、すつごくセクシーだと思つね、などとうつとりと言つ。そうね、あたしもそう思つね、と房江も答える。

あたしみたいな「大女」が、しなしな歩くのはグロテスクなだけつて言われたこともあるけどね。女だとは見えないから、過剰に女でいなくちゃね。この過剰さは快感なんだ。

あたしたちは、あちら側の眼からは「活なくて空っぽで悲惨」なのよね、でも、あたしたちにだつて楽しめることも、よろこべることもある。よろこびの数としては、あちら側と変らないわ。ささやかなよろこびだけだ。

ペンギンは包帯を巻き直す時はいつも楽しそうにそんなことを言つ。そしてついでのように、スペインに行つてみたいわねえ、と眩く。ペンギンは、房江が寝袋に横になつてしばらくすると古ぼけた手帳をひらく。そこにはスペインに行つたことがあるという人から教えてもらったスペイン語が書き付けてあるらしい。丸く屈めた背中をこちらに向け、ぶつぶつと眩いている。今日のペンギンのしあわせレッスンは「道迷い編」らしい。

助けてください…アジユデメ、ボル、ファボル。どこで失くしたか、わからない…ノ、レクエルド、ドンデ、ロ、エ

ベルデイド。道に迷つてしまいました：メ エ ペルデイド。すみません、道を教えて下さい：ベルドネポドリア デスイルメ コモ セバ。

スペインに行つてまで、行き場所を見失つつもりだろうかとそれとも、スペインでなら、迷つた道から抜け出せるのだろうか。だいいち、あのスペイン語はちゃんと通じるのだろうか。

開いた膝の間に手帳を置き、薄汚れたフリルだらけのドレスの大きな背中を小刻みに揺らせて、小声で何度も何度も繰り返している。

「スペインに行けたらいいね」と、その背中に言った。

テキサス婆の兔が、死んだ。一日、雨が降り続けた。その翌日とそのまた翌日には、風が吹いた。テキサス婆のテントが一日中、低い音でハタハタと鳴り続けた。

兔のために婆が八百屋の裏口から貰ってきたというキャベツの屑が段ボールの中で腐つて、茶色の汁が流れ出し、ひどい臭いを放つた。ペンギンが黙つてそれを片づけた。兔を公園の植え込みの間に深く埋めてやったのもペンギンだ。

婆のテントの外には、糞箱が放り出されたまま少しずつ乾いて干からびていき、いつしか沁み付いていた臭いも消えた。夜になると、生き残りの蟋蟀が糞箱の下あたりで鳴いた。長く尾をひいては耳の底に残り、その余韻が消えないうちにま

た切なそうに繋がつて始まるその音色は、房江の聞こえない片耳に何時の間にか住み着いた耳鳴りと溶け合つた。

風が止むと雲が晴れ、中天には丸い月が浮かんでいた。ママ お月さま、いま、なんて言つてる？ あの子の声も耳もとで囁く。夫を駅に迎えに行く道で、あの子はいつもそう訊いた。房江の背中で背伸びをするように身体をのけぞらせて、月を見ては必ずそう訊くのだった。お月さまの話を母子で飽きるほど繰り返した。

テキサス婆は、言つ。あたしはね、自分の最後くらいは覚悟しとつよ。あんたがここに来る一年前に、ペンギンのところへ居つた年寄りやけどね、どこかの会社の寮の賄い婦をしよつたらしかつたつちやけど、七十歳になつたときにクビになつてね、やつぱりあのサックスおじさんのベンチでペンギンに拾われて、ここにきたとよ。毎日毎日、ここらの飲み屋の店先をめぐる、あたしを皿洗いで良かけん使つてくたさい、て頼み込んでまわつてねえ。けど、七十の家なしの婆さんを雇つ店なんかあるもんかねえ。それでも婆さんは諦めんかつた。あたしはまだ充分働けるつて言い張つとつたよ。

ある日、特に冷え込んだ粉雪の降る夜やつたけど、ペンギンと一緒に探しに行つたら、飲み屋の路地の片隅で、婆さん凍つて死んどつたよ。

テキサス婆は足元の雑草をむしりながら眩いた。あたしも、たいして変わりやあせん。それで良いつたい。

ただね、息子がね、と婆はむしつた草を投げて顔を上げた。息子がそれを聞いて、どう思うかねえ。紛れもなく、このあたしが産んだあの息子が、道端で飢えて病んで野垂れ死んだ母親のことを知ったら、どう思うやるか。それだけがあたしの最後のこだわりだ。兎が死んで、こげん悲しかろうが？

「あたしは違つなあ」と房江は言った。ホームレスになつて野垂れ死にしたなんて、あの子にはどんなことがあつても知られたくないわ。

あんたは、幸せたいね。成人するまで育てておらんのやら。夢物語のまんまたい。

夢を繰りかえし見る。ただじつと母子を眺めているだけの、はかない夢だ。

子供の掌にオレンジ色のミニカーがゆるく握られている。ああ、「ニッサンチェリー」だわ。房江の唇がほころぶ。あの子のいちばんのお気に入りミニカー。あまりいつも握り締めていたので、色が剥けてしまっている。目を覚まさせれば、自分も夢から目覚めると分かっているけれど、あの子を抱き寄せたい思いに耐え切れなくなつて、両腕を伸ばした。その自分の手に目が吸い寄せられた。

いったいどうなつたのか白く滑らかな若い肌に戻っていた。垢じみてもおらず皺だらけでもない。

あの頃の目分に戻っている。

ああ、帰ってきたのね。やつとあの幸せな日に戻れたんだ。何て、何て、長い悪夢だったんだろう。

房江は、坊やを抱きあげて、しっかりと抱きしめた。涙でぐしゃぐしゃになりながら、垢で汚れて湿つた臭い、する寝袋に、空っぱの胸を抱いて横たわっていた。

プーヤンが酒瓶を懐に入れてやつてくる。例のごとく酔つてのクタまぎが始まる。

俺だつてまともに働こうと思つたよ。だけど、心が揺れちまつたよ。こないだ妹が、俺を捜し当てて訪ねてきたんだけどね。妹の住所に住民票を移して職を見つけて熱心に勤めるんだよ。だけど、いざ履歴書をもつていこうとする、いつも逃げ出したくなる。うまくいきっこ無いんだ。三十年も家庭を二の次にして会社に滅私奉公してきてさ、そのあげくあっさりストラだよ。馬鹿みたいだろ？俺って、いったい何だったんだよ。ホームレスになるために、あのサリーマンの三十年を寄り道したのかよ。どうしようもないんだよ。真つさらになることなんて、今更もう、出来ないんだよ。妹のやつには分らないんだ、マイナス思考だとか、怠け者だとか、そんな簡単な言葉で片付くものなんかじゃ無いってことがさ。

プーヤンは、酒臭い息を吐きながら、黒い爪をべとついた

髪に突っ込んで掻きむしる。垢にまみれた茶色の顔に目脂のついた眼が細く開かれ、涙が光っている。深く沁み付いた臭気。無気力に丸められた肩や背中。あるときクラリとずれて、ずれながら生きてきて、そのずれをどうすることも出来ないまま雪崩落ちてしまった。それはそのまま、房江自身やペンギンなのだった。

リストラでローン破産して家族離散だって、もうじゅうぶん分かったわよ、聞いているとこっちまで死にたくなっちゃう、とペンギンがうんざりと言っ。あんた、あっちの公園の仲間と険悪になっているんだってね。

ブーヤンは荒れまくり、ついにペンギンも切れて、おまえいい加減にしろよ、と回し蹴りを入れて、テントの外に叩き出してしまった。酔っぱらって道端で寝込んだら凍死するよ、と房江が心配すると、大丈夫、あいつは全部投げて、そのくせ中途半端で、死ぬ気力もないのよ、とペンギンはそっけなく言った。

翌日、房江は、デパートの外壁の大型画面の下で頭を抱え込んでいるブーヤンを見かけた。覗き込むと、目の下が大きな青痣になっていた。どうしたの、大丈夫？ と訊ねたが返事はなかった。

頭上の大型画面が、しあわせですかーと明るい声で叫んだので、ほら何か訊いてるよ、と笑うと、ブーヤンが、ばか

やろつと、眩いた。しあわせか、と訊ねた大型画面は誰の返事も待たず、すぐにめまぐるしく四輪駆動の新車や中南米らしい赤茶色の山々の映像を繰り出してCMを叫びはじめた。ひび割れて放散する音響は、街路にこもる車の騒音に端から吸い込まれ、すぐに忘れ去られていく。

推薦 ひわき ゆりこ（胡堂）

デジタル文学館